



TITLE:

14.超高真空高分解能透過電子顕微鏡法によるSi(111) $\sqrt{3}\times\sqrt{3}$ -Biの吸着原子直接観察と構造解析  
(東京工業大学大学院理工学研究科物理学専攻,修士論文題目・アブストラクト(1990年度))

AUTHOR(S):

芳賀, 豊

---

CITATION:

芳賀, 豊. 14.超高真空高分解能透過電子顕微鏡法によるSi(111) $\sqrt{3}\times\sqrt{3}$ -Biの吸着原子直接観察と構造解析(東京工業大学大学院理工学研究科物理学専攻,修士論文題目・アブストラクト(1990年度)). 物性研究 1991, 56(6): 707-707

ISSUE DATE:

1991-09-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/94640>

RIGHT:

## 14. 超高真空高分解能透過電子顕微鏡法による Si(111) $\sqrt{3} \times \sqrt{3}$ - Bi の吸着原子直接観察と構造解析

芳 賀 豊

Si(111)  $7 \times 7$  表面に基板温度約 250℃ で Bi を 1 原子層程度蒸着すると  $\sqrt{3} \times \sqrt{3}$  構造が形成される。本論文では、透過回折法 (TED法)、および高分解能透過電子顕微鏡法 (HRTEM法)によってこの  $\sqrt{3} \times \sqrt{3}$  構造の構造解析を行なった。

TED法では、 $\sqrt{3} \times \sqrt{3}$  超格子スポットの強度を測定し信頼度因子を最小とする構造が Bi 原子がトライマーをつくり第 1 層の Si の上に Milk-Stool 型に配置する事を結論した。

HRTEM 法では Plan-View によって  $\sqrt{3} \times \sqrt{3}$  構造を形成する Bi 原子を直接見ることができた。マルチスライス法による像のシミュレーションを行い、TED による結果と比較検討して構造モデルを決定した。

HRTEM 法で表面に吸着した原子を 1 つ 1 つ識別できることを初めて示し、直接表面原子の配置を解析する手法の基礎を確立した。

## 15. 電子顕微鏡内その場蒸着法による準結晶の作製

箕 田 弘 喜

$\text{Al}_b\text{M}_n$  合金に於いて、20面体対称性を持つ 3 次元準結晶が発見されて以来、それぞれ、8 回、10 回、12 回の対称軸を持つ 2 次元の準結晶が発見され、その構造についての研究が多く行なわれている。本研究では、超高真空電子顕微鏡内その場蒸着法を用いて、 $\text{MgO}(111)$  表面上に、Al-Fe、又は Al-Cu-Fe といった、合金の準結晶を作り、その成長の動的過程を TEM-TED 法を用いて観測した。Al 蒸着後、約 300℃ での Fe の蒸着では、蒸着直後から、準結晶が形成されたが、Fe を室温で蒸着し、温度を上げることによって、従来の報告とは異なり、準結晶は、容易に生成した。又、Al-Cu-Fe 3 元合金についても、同様な観察を行なった。

## 16. TGS の $T_c$ 近傍における分域壁運動

張 家 良

TGS の  $T_c$  近傍における誘電分散は、臨界緩和をする分極からの寄与と、分域壁運動の寄与からなる。本研究では、低周波誘電率測定 (1 KHz ~ 13MHz)、高周波誘電率測定 (1 MHz ~ 1 GHz) を行い、そのデータを解析した。臨界緩和はほぼ単一 Debye 型緩和で、緩和周波数は、転移点の近くでは、 $f_r = A(T - T_c)$  に従い、 $T_c$  において 10MHz まで下がった。分域壁運動は多分散緩和型で、緩和周波数は、45~48℃ では、約 100KHz で一定であるが、 $T_c$  の約 0.2℃ 下から  $T_c$  に向かって急激に高くなり、 $T_c$  では約 1.4MHz になることが見出された。さらに、 $T_c$  の付近における、誘電率の測定電圧振幅に対する依存関係も確かめた。